

第2部 随筆(作文) テーマ「秋祭り」

一般の部

佳作1

祈りの矢

感王子美智子

熊本地震の翌年、災害復旧支援を続ける夫と共に、気仙沼から阿蘇へ引越した。カルデラに丸く広がる田園。それを見守るように阿蘇神社がある。初めての夏が過ぎ、少し涼しくなった、夜の門前仲町を散策してみようと思った。薄明かりの石畳。観光客の姿は消え、チヨロチヨロと湧水の音が、鳴き始めた虫たちと、セッシヨンする。先には鳥居があり、阿蘇神社の参道が続く。目をやると、参道を走ってくるケートラがいる。

「え?えええ?!」驚いて立ちすくむ。荷台には人影がある。人影が、横に向けてパシツ、パシツと、何かを数回放った。車は、鳥居の手前で止まった。「すみません、流鏝馬のけいこしとったんで」荷台

から、弓を持った男性が、降りてきた。田実祭と言う秋祭り、毎年、ここで、流鏝馬が行われるのだそう。しかし昨年は、震災で中止に。来たばかりの六月、御田祭と言う祭りを見た。宇奈利さんという、白装束の女性たちが、水々しい田んぼの中を行列して歩く、それは美しい光景だった。実りを祈り、実りを見守り、実りに感謝する、阿蘇には、田の四季と共に生きる、祭りがあふれる。気仙沼にも、さんま祭り、かつお祭り、みなと祭り、海と共に生きる祭りがある。今頃、気仙沼は、秋のさんま祭りだ。街中のあちこちで、秋刀魚のいい匂いが漂っているだろう。思い出したら、ぐうっと、お腹が鳴った。

「ははは、さんま祭り、行ってみたか、食ってみたかね。気仙沼も阿蘇も同じです。水に生かされ、水に奪われ、水と一緒に暮らします。祭りは、自然とともに生きる祈りと感謝です。流鏝馬、見に来てください。三本一本は、家族ん為、一本は、阿蘇の復興の為、そして、もう一本は、気仙沼の復興は祈って、射させてもらおうけん」祭りの日、三本の矢は見事、命中した。祈りを込めた秋の空は、高く高く繋がっていた。